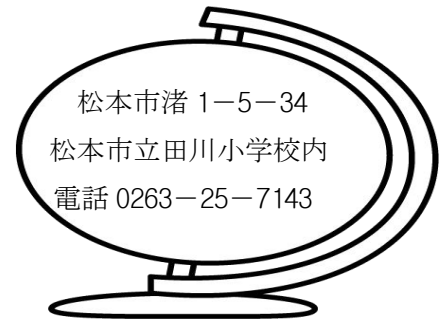


松本市子ども日本語支援センター便り

平成 25 年 8 月

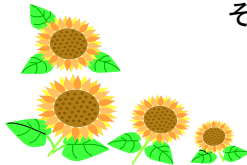
No.11

支援児童生徒数 35 人 (8 月 20 日現在)



松本市渚 1-5-34
松本市立田川小学校内
電話 0263-25-7143

セミの元気な鳴き声が、“猛暑”“酷暑”といわれる日本の夏を一層暑くする毎日が続いています。



そして、日本語を母語としない子どもたちにとっての夏休み。楽しい思い出ばかりでなく、休み帳に自由研究、工作、それに加えて日本語の勉強と、宿題がたくさんで最終日に泣きながら頑張った子どもたちも多いことでしょう。

8 月初旬の木曜日夕刻、松本市多文化共生プラザで開かれている「ヤング日本語教室」には、日本語学習や学校の宿題をするために子供たちが大勢集まっていました。夏休みの遊びたい盛りの時期に、ボランティアや大学生のお兄さんお姉さんたちと共に学習に取り組む姿に、彼らの真剣さ、必死さを感じました。

さあ、2学期のスタートです。子どもたちにとって実り多い毎日となりますように。

日本の学校教育の仕組みを知ってほしい！

“保護者交流会”開催 7月14日(日) 並柳団地集会所にて

「子どもたちはどんな学校生活を送っているの？」「学校生活に必要な費用はどれくらい？」

7月14日、市教育委員会との共催で、外国由来の子どもたちの保護者を対象にした「保護者交流会」を開催しました。今年も、市内でも外国人が多く住む並柳団地にある集会所で開催。団地周辺だけでなく、市内全域から12家族16人(ブラジル、ペルー、中国、タイ)が参加し、日本の学校教育の仕組みや学校生活について話を聞きました。通訳を介して、市教育委員会指導主事の先生や日本語支援員と直接話す時間も設け、お互いに理解を深めました。

“知らないことがわかった喜び”は、大人も子供も同じ。そして私たち日本語支援員も、生の声を聞くことで外国から来た保護者の方の大変さを知ることができ、有意義な時間となりました。

地域の方々による大きな支え

今回の交流会は、毎週日曜日午前中に開いている子どもたちのための日本語教室「中信にほんごひろば」の会場を半分お借りして開催しました。この日本語教室は、日本語支援センターの母体であるNPO法人・中信多文化共生ネットワークが主催する“子どもたちが気軽に歩いて通える日本語教室”。NPOスタッフだけでなく、並柳団地の町会役員や民生委員の方々が全面的に協力してくださっているのが大きな特徴です。「地域の宝である子どもたちを国籍にかかわらず大切に育てたい」という温かい気持ちが子どもたちの大きな支えになっています。

交流会で大人が話を聞いている隣の部屋では、子どもたちが日本語学習に真剣に取り組んでいました。「学校の勉強が少しでもわかるようになりたい」と、仲間とともに勉強する子どもたち、そこに寄り添うボランティア、そして陰になりひなたになり子どもとスタッフを支える町会の方々。温かい空気が会場いっぱい広がっているのが印象的でした。



支援の現場から

「僕、こんなに話せて書けるようになったよ」

～ブラジルから来た少年の1年 少年の努力と周囲の寄り添い～

昨年4月、市内の小学校に入学したブラジル人のA君。日本語が全く話せないため、入学当初はクラスでも日本語教室でも心を開けず、授業中もウロウロしたり奇声を発してばかりでした。「どうしてみんな僕のことを嫌いなんだ」とポルトガル語で話したAくんは、1学期の途中、家庭の事情で市内の別の小学校へ転校していきました。

新しい学校では、1対1で日本語支援員が向き合いました。まずは何でもいい、“声を出すこと”を目標に寄り添うこと2か月、ようやく言葉にはならないものの奇声ではなく“声”を発するようになりました。そのうちに友達の名前を口にできるようになり、9月、支援員が運動会を応援しに行ったことをきっかけに二人の間に信頼関係が築かれ、A君の学習意欲が次第に高まり始めました。

支援員は、A君が発した日本語をすかさずすくい上げ、日本語学習へとつなげる工夫をし、そして“寄り添う”ことに努めました。その結果「日本語がわかる→意欲が高まる→もっとわかる→原級の勉強も頑張りたい！」と正の連鎖となり、この夏、すべての授業を原級で受けることになり日本語教室を卒業しました。

支援開始当初、問題行動の多いA君を「この子は日本語以外にも何か別の問題も抱えているかもしれない」と誰もが思っていました。ところが、頑なに閉じていた気持ちがほどけ、そこに日本語が入ったことで、A君らしい素晴らしい成長を見せるようになったのです。支援員だけでなく、学校の先生と友達の関わりも非常に大きな助けとなり、原級に戻った今、担任の先生は「原級ではこれから、A君にもう一声かけるように心がけます」とおっしゃっています。周りの人々の“寄り添い”が成長を助けた好例です。



日本語指導の落とし穴！「流暢に話せても…」

フィリピンから転入してきた小学2年生のBさんは、日本に来て約半年。日本語の初期指導を受けながら、クラスの勉強も頑張っています。何事にも非常に意欲的で、クラスの授業でも手を挙げて発言するほど素晴らしい成長を見せています。

順調そのもので、一見、なんの問題もないように見えるBさんですが、ある日、短いお話を書かせたところ、助詞の脱落や誤用といった問題がいくつも見つかりました。先生や友達との会話では、日本人同士でも助詞は抜け落ちますし、間違いがあつたにしても周りが“察して”あげてしまうので、そのまま問題なくコミュニケーションができてしまいます。会話がなんとなく成立してしまった時点で「この子は日本語ができる！」と評価されてしまう…。それは時として落とし穴になることがあります。

日本人の子供なら、無意識のうちに「話し言葉と書き言葉」を使い分け、助詞(例えば、場所を示す「に」と「で」の使い分けなど)は自然習得できているので大きな問題にはなりません。しかし、日本語が母語ではない子にとっては、その理解が難しいのです。もし、これらの小さなミスが見過ごされてしまったら…“話は上手だけど、作文が書けない”アンバランスな日本語力にとどまってしまう、そして学年が上がるにつれ教科学習に躓いてしまう恐れも出てきてしまいます。

「こんなことぐらい…」と日本語母語話者が思ってしまう小さなミスも、第2言語として日本語を学んでいる子どもたちにとってはその陰に大きな問題がある場合が多いのです。こうした視点を持ちながらの日本語支援が大切で、私達支援員も日々、子どもたちの日本語力を観察しながら向き合っています。